加茂法話会　平成二十九年八月二十五日

見附市　智徳寺内　平澤俊隆

【演題】身命の在らんほど、仏道に順ぜんと思ふべきなり

祖席に禅話を覚り得る故実は、我が本より知り思う心を、次第に知識の言に随って改め去くなり。

（正法眼蔵随聞記　二－十）

念々に留まらず日々に遷流して、無常迅速なる事、眼前の道理なり。知識経巻の教を待つべからず。念々び明日を期する事なかれ。当日当時許と思うて、後日は甚だ不定なり、知り難ければ、ただ今日ばかりも身命の在らんほど、仏道に順ぜんと思ふべきなり。

仏道に順ぜん者は、興法利生のために、身命を捨て諸事を行じ去なり。

（正法眼蔵随聞記　二－十七）

（衲子もこれほどの心を一度発すべきなり。）

命を軽くし生を憐れむ心深くして、身を物制に任せんと思う心を発すべし。

若し先よりこの心一念も有らば、失はじと保つべし。

（正法眼蔵随聞記　二－九）

【引用】正法眼蔵随聞記　水野弥穂子　訳　筑摩書店